

例 言

1. 本書は、国営によって昭和43年（1968）・昭和44年（1969）におこなった法隆寺若草伽藍跡発掘調査の報告書である。本書では、昭和43年の調査を第1次調査、昭和44年の調査を第2次調査と称する。
2. 本発掘調査は、文化庁を中心として、奈良国立文化財研究所（当時）、奈良国立博物館、奈良県教育委員会が共同で実施した。
3. 本発掘調査は、下記の遺跡を対象として実施した。
法隆寺若草伽藍跡（奈良県生駒郡斑鳩町）
4. 本報告書の作成にあたって、法隆寺・奈良県・斑鳩町・安堵町の全面的協力を得た。
特に、大野玄妙、古谷正覚、大野正法、林野了三各氏の御高配に感謝する。
5. 本報告書の作成は、岡村道雄、川越俊一の指導のもとに、森郁夫（帝塚山大学）、深澤芳樹、次山淳、高橋克壽、中川あや、今井晃樹、林正憲、山本崇、島田敏男、大林潤、光谷拓実、大河内隆之、清水重敦、肥塚隆保、石村智、牛嶋茂、中村一郎、杉本和樹、鶴見泰寿（奈良県立橿原考古学研究所）、平田政彦（斑鳩町教育委員会）がおこなった。
編集は森・深澤がおこない、南部裕樹（立命館大学）がこれを補佐した。
各章・節の執筆者は、目次と本文末に名前を明記した。
遺物の実測、図面の浄書、本文・表の校正は、東仁美、上田元子、大谷寧子、岡田雅彦、小倉依子、掛本紀子、垣内拓郎、岸本泰緒子、北畑美知代、北野陽子、小池綾子、芝華恵、徳田真理、戸田英里砂、橋本美佳、福島昌恵、森下しのぶの助力をえた。
6. 報告にあたっては、遺構との対応を心がけたが、遺構との対応が不明な遺物については、取り上げラベルごとに報告した。
7. 塔心礎および出土遺物の石材鑑定は、肥塚隆保による。
8. 本報告書に掲載した写真のうち、遺構写真は佃幹雄、巻首写真と遺物写真は牛嶋茂、考察で用いた写真はおもに牛嶋、中村一郎、杉本和樹が撮影した。
9. 英訳は、石村智がおこなった。
10. 出土資料は奈良文化財研究所にて保管しているが、軒瓦の一部については法隆寺と奈良県立橿原考古学研究所附属博物館にて展示されている。
11. 現地調査および報告書の作成にあたっては、上記の方々の他に、多くの方々からのご指導、ご助言、ご支援をいただいた。明記して感謝する。（敬称略、順不同）
荒木浩司、栗田薫、出田和久、伊東隆夫、岩戸晶子、岩本次郎、河角龍典、木立雅朗、金田章裕、佐藤亜聖、鈴木嘉吉、関川尚功、高田美佳、高田良信、高宮邦寛、寺澤薫、野尻忠、橋本紀子、長谷川晋平、幹田秀雄、和田晴吾。